HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	妖怪文化研究家から見た「世界遺産と地域振興」
Author(s)	河野, 隼也
Description	北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」. 平成20年2月29日～平成20年3月3日. 札幌市. 「ヘリテージツーリズム」セッション『ヘリテージツーリズムをめぐる新視点～日中双方の視点から：建築遺産から無形文化遺産まで』. モデレータ：山村高淑. 平成20年3月2日.
Relation	北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」報告要旨集
Issue Date	2008-03-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39099
Type	conference paper
File Information	05-kohno.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

妖怪文化研究家から見た「世界遺産と地域振興」

Issues and Needs Facing “the World Heritage and Regional Development”:
A case of *Yokai*-Culture and Tourism in Taishogun-Shotengai, Kyoto

河野　隼也
KOHNO Junya

キーワード：妖怪、まちおこし、文化遺産、継承者

1. はじめに

私は、京都市上京区の一条通りにある大将軍商店街で 2005 年から実施されている妖怪を題材にした町おこしに携わっている。そこで私は妖怪をモチーフにしたホームページやグッズ、広告などのデザインや、イベントの企画や運営、イベントで使用する造形物の制作などを他のスタッフと分担して手がけている。

近年、映画や小説、漫画など様々な分野の娯楽作品で妖怪を題材にした作品がたくさん発表されている。妖怪はこれら娯楽作品に登場する人気キャラクターだが、一個人の創作により生まれるわけではない。キャラクターとして造形された妖怪は全て何らかの古い時代の資料に基づいて作られている。それは近世以降に民俗学者が収集した民間伝承であったり､江戸時代の浮世絵や黄表紙(大人向けの絵本）であったりする。妖怪はあまねく古典的な題材をもとに造形されていると言えるのだ。

今回は、古典的な題材をもとに新たな表現を試みるクリエイターとして、また、実際にクリエイターとして制作したものを地域振興に活かす立場の者として、「世界遺産と地域振興」「文化遺産の保全と観光利用」について考えてみたい。

2. 世界遺産の絶対視による伝統的世界観、価値観の喪失

『世界遺産と地域振興』の中で、世界遺産制度について「登録物件が欧米の物件に偏っている」「それは結果的に（欧米＞アジア）というように文化に優劣をつけることになってしまう」「制度自体が国家間の文化的優劣を暗黙の了解とさせる政治的ツールとして利用されている」という様々な問題点が指摘されている。私はこの中でも「世界遺産をブランド視すること」という点に注目したいと思う。それは、「世界遺産を無条件で礼賛し絶対視すること」による「文化に対する評価基準の画一化」、つまりは「価値観の一元化」につながることだと思う。

そもそも世界遺産の理念は、簡単に言ってしまうと「世界中にある、過去から継承されてきた様々な形の遺産を保全し、人類全体の宝として後世に伝えること」にある。文化遺産はある日急に生まれるものではない。その地域の歴史、道徳、信仰、自然環境など、一言で括ってしまうとその世界観の中に成り立つものと言えるだろう｡そして、その世界観の中で、価値のあるものとされているからこそ、先人たちはそれを大切にし、文化遺産として現代に託したのだと言えるのだ。

過去から文化遺産を継承すると言うことは、先人たちが伝統的に培ってきた世界観も同時に継承することだ。しかしながら、その文化遺産を継承した人たちが、それを世界遺産に登録するために八方手を尽くして奮闘し、いざ登録されれば国際社会に評価されたと諸手を挙げて喜ぶ。つまり世界遺産を「絶対的な価値観」として受け入れてしまえばどうなるだろうか。観光客を大量に受け入れるために自分たちの生活環境を観光客向けに整備する。世界遺産の価値観、観光客の価値観に合わせた街づくりをする。それはやがて、自分たちの文化の中で培ってきた価値観を放棄することとなり、先人から受け継いだ世界観の放棄につながるのではないだろうか。そして、それは先人から受け継いだ形ある遺産とともに、無形である文化を、世界観を後世へと継承していくと言う行為とは全く逆の行いと言えるのではないだろうか。

3. 観光がもたらす文化に対する憧憬と破壊

あえて批判を覚悟で言えば、多くの観光客にとって、観光は決して高所なものではなく大衆の通俗的行為である。たくさんある余暇の過ごし方のひとつ、娯楽のひとつである。

したがって、文化遺産を観光利用する際に、観光客がその文化遺産に触れ、文化を継承していくことの大切さを学ぶ、というのは淡い期待と言うしかない。殆どの観光客にとって観光は物見遊山

と同義なのだ。

こんな話がある。数年前に放映された家族向けのアニメーション映画で、主人公が魚の親子で、人間のペット業者に連れて行かれた息子を、父親が幾多の困難を乗り越えて探すという、親子の絆を描いたストーリーのものがあった。この映画は大いにヒットし、世界中を感動の渦に巻き込んだと評されたのだが、その映画がヒット後、その主人公親子の魚種が激減したのである。理由は簡単。その映画を観た観客がその魚種をペットとして飼いだしたからだ。そして、需要の高い商品をより多く売るために業者による乱獲が始まったのである。映画の内容に感動したのなら、その魚を自宅で飼うなどありえないことだ。人間の欲求は、時にこういった矛盾を生むのである。

観光において、このようなことは絶対ありえないとは言い切れない。先ほども言ったとおり、観光とは大衆の通俗的行為である。観光旅行をすることと映画館に行くことには、行為として、そう差異があるとは思えない。「あるモノに感動したのに、それを欲するがゆえにそれを害する」これはそのまま文化遺産の観光利用において発生する諸問題を表現するにふさわしい言葉ではないだろうか。麗江のように、多くの人がその美しい町並みに憧憬の念を抱き、その上、地元住民が外部へ流出し、観光客をターゲットとする商人が多数流入してきたというような場合は特にその傾向は顕著であると思われる。麗江という街を好意的に感じ、欲するがゆえの活動が結果的に、麗江という街そのものを観光客の欲求に応えるための街に変容させ、住民の生活に密着した様々な事象に急激な変化をもたらし、長い歴史の中で培ってきた文化の本来のあり方を破壊することにつながるのだ。

4. 文化の保全と、時代の変化による生活形態の変化とのアンビバレンス

外部からの評価がそのまま自分たちの価値観となり、自分たちの文化を自分たちで評価することがなくなる。これまで生活に密着していた様々なものが観光客の欲する形に急激に変容していってしまう。これらは先人たちが培ってきた世界観や、その中で生まれた文化遺産を継承し、次代へ伝える行為において抜き差しならない悪影響を与えることは火を見るより明らかである。

これまで、文化を継承すること、保全することに重きを置いてきたが、では、先人から文化遺産を、その世界観を継承し次代へと伝えると言うことは、過去から様々な生活習慣、文物、建築物などをそのまま受け継いで、現代においても、何百年も前と同じように暮らすということなのだろうか。当然、これは非現実的な幻想である。

過去から受け継いだものは失うと二度と手に入らない貴重なものである、一方で、時代が刻一刻と変化していく中で人々の生活もそれに合わせて変化していく。はたして、文化の保全と時代の変化による生活形態の変化という相反する二つの事柄に理想的な折衷点というのはあるのだろうか。

麗江の文化遺産と観光利用における諸事情を考えた時に、私は知人の日本画家の言葉を思い出した。

「日本画の世界において、ある一人の天才が現れたとして、その天才がどれだけ傑出した能力を持っていたとしても日本画の伝統を覆すことは出来ない。なぜなら日本画の伝統は、過去、多くの天才たちが作り出したものであるから」

私のような、妖怪などという古い題材を扱う作り手にとって、この言葉には大いに学ぶべきものがある。また、この言葉の中には過去から受け継いだものに対する処し方のヒントがあり、文化の保全と時代の変化による生活形態の変化という相反する二つの事柄に対する一つの考え方の糸口があるように思う。

ここで少し京都における私の活動についてお話させていただきたいと思う。

5. 妖怪の造形化の歴史に見られる先達者の英知

私が携わっている大将軍商店街は、京都市上京区の一条通りという通りにある。丁度そこは平安京の最北部に当たり、平安時代における一条通りの位置は現代においてもほぼズレがないといわれている。

さて、室町時代に作られた「付喪神記」という絵巻物によると、煤払い（大掃除）によって捨てられてしまった古道具たちが、人間たちに復讐するため、古の教えに従い付喪神に変化して、（変化した古道具たちは鬼の姿になったり獣の姿になったり、はたまた古道具に手足が生えた格好になったりする）自分たちが変化できたことを変化の神に感謝するお祭り行列を行うのだが、このお祭り行列の通り道が一条通りなのである。この説話に基づいて、大将軍商店街は道具を扱う商店街として、「付喪神記」にある古道具が変化するという概念に、現代的な解釈を加えエコロジーやリサイクルの大切さを訴えるというテーマのもと、妖怪たちの通り道である一条通りを「妖怪ストリー

ト」と銘打ち、町おこしに展開している。

私はその大将軍商店街での町おこし活動の一環として、妖怪を題材にした様々なデザインを手がけている。また付喪神が一条通りを練り歩いたという故事に基づいて、それを現代に再現しようという妖怪仮装行列の際に使用する、妖怪の衣装の制作などを行ったりもしている。こうした際に、過去に作られた妖怪の図像を参考にするのだが、過去にたくさんの先達者がいかに創意工夫をしていたかを再認識させられる。

キャラクターとしての妖怪は、過去作られたものを色々な時代の人が反復再生して今に伝わる。例えば、室町時代の絵巻を元に江戸時代の浮世絵が作られ、さらにそれを元に昭和に漫画が描かれ、それが現代になってからアニメ化されるといったようなことが実際に起こっているのだ。まさに妖怪の造形化の歴史は過去の幾多の天才たちが作り出したものと言えるだろう。私の感覚から言えば、「ゲゲゲの鬼太郎」などで有名な漫画家の水木しげるは妖怪の造形化の天才である。その水木しげるも伝統的な妖怪の絵を見事に踏襲しながら、オリジナルな要素を付け加え自分のスタイルにするという作業を行っている。また、私個人の話だが、大将軍商店街の町おこしに関わるようになってから、伝統的な流派の日本画を学んでいる絵師の方や、半世紀以上もお化け屋敷の人形を作っている職人さんのお話を伺ったり作品を見せていただいたりする機会に恵まれた。基本的にパソコンを使って作品を仕上げる私の制作スタイルとは異なる技術を有する方たちなのだが、それでも技術や表現の方法において大いに参考になる部分がある。妖怪を志向した表現をする作り手は、皆、先達者の作り出したものに学びながら新たな表現をおこなっているのである。

この大将軍商店街での町おこしの関係者は、殆ど私と同年代の 20 代で、皆一様に「妖怪が好き」という理由で関わっている。また、毎年仮装行列の際に妖怪に扮して行進してくれる数十人の人たちも殆どが地元の大学生である。以前、国際会議の場でこの大将軍商店街での妖怪をテーマにした町おこしの事例を発表した際に、ある外国人の方に「若い世代の人たちがこういう古い題材に興味を持って、実際に何らかの活動をしていることは珍しい事例」という意見をいただいたことがある。妖怪というのは観光と同様に、決して高尚なものではないし、また全ての人が諸手を挙げて歓迎するようなものでもなかったようだ。江戸時代においての「化物（妖怪）」は庶民の娯楽の題材であり、読み物、玩具、嗜好品と様々な媒体にキャラクターとして登場する。そこには子供向けのものから大人向けのかなり猥雑な表現がされたものもある。しかしながら、近代に入ってからは江戸期のような大衆文化に対しての否定的な意見が生まれ、当然、妖怪を題材にした娯楽は一気に下火になってしまった。民俗学者の柳田國男は、民俗調査のために農村などでお化けの話を聞きだそうとした際、「まだそんな迷信を信じていると思われるのは心外だ。田舎を軽蔑する質問だ」と叱責されたことがあると不満げに述懐している。また、漫画家の水木しげるは当初、妖怪というテーマが色物として評価され非常に苦労したと述べている。さらに、大将軍商店街においても、開始当初は妖怪を町おこしのテーマにする事に対して懐疑的な意見がほとんどであった。妖怪をテーマとした映画や漫画がたくさん発表されているような昨今の風潮から、世間での妖怪に対する注目度を説いても、不気味、縁起が悪い、町おこしの題材としてメジャーではないという理由で敬遠されることが多かった。何も知らない人が妖怪に拒否反応を起こすのは、当然と言えば当然である。これも妖怪が通俗的（ある意味で卑俗的）なものであり、多くの負のイメージを孕んでいることに起因するものだと思う。（だからこそ作り手にとって面白い題材とも言えるのだが）

大将軍商店街においても妖怪という題材で町おこしをすることに対して懐疑的であったことは前述の通りだが、それでもスタッフによる地道な活動が世間の目に止まり、マスコミ等で取り上げられて注目を集めるようになった。そしてイベント時に多くの人が集まり出してから少しずつ商店街内部での考えが変わっていき今に至っている。まだ何も形になっているわけではないし、偉そうなことは言えないのだが、多数派の価値観に染まることなく、己が価値観と信念の元、過去に学びながら新たな表現を模索する。そこには先人たちが作り上げてきたものに対して正面から向き合う姿勢があるように感じている。

私がこれまでの活動で得た経験から強く感じるのは、過去から現代に継承されている全てのものには先人たちの様々な思いや英知が詰まっているということである。

重要なのは、先人たちが遺したものを自分たちであらためてきちっと評価し、向き合うことではないだろうか。幾ら国際社会に評価されても、世界遺産に登録されても、多くの学者たちに賛辞の言葉をもらっても、たくさんの観光客が訪れても、

先人から受け継いだものの真価を量れるのは、そこに秘められた英知を読み解けるのは、先人たちと同じ世界観の中に生きる遺産の継承者しかいないと思う。外部から持ち込まれた価値観により、過去から受け継がれた遺産の真価が推し量れぬまま失われていくのはあまりにも惜しいことである。そして、その遺産の継承者が、その真価を知った上で取捨選択するのならば、たとえ彼らの生活がこれまでと一変したとしても、それは民族の歴史上、一つの進歩的変化と言えるのではないだろうか。

6. さいごに

「世界遺産と地域振興」「文化遺産の保全と観光利用」における諸問題は、答えの用意されていない問題である。したがって八方丸く治めるような答えに行き着くことは不可能だろう。また、それらはあまねくその文化遺産を受け継いだ当事者たちの問題であり、私たちが幾らその問題に心を砕いたところで、結局はそれらの問題の行き着くところを見守ることしか出来ないのかもしれない。現代に受け継がれた遺産を未来へと伝える役目を負っているのは次代を担う若者たちである。彼らが彼ら自身の価値観で先人たちの遺したものと向き合った上で下した判断ならば、その結果がどうであれ、傍観者である私たちが憂うべきものではないのではないだろうか。

妖怪文化研究家／京都市大将軍商店街町おこしスタッフ